

小説同人誌評 44

たかがキムチ、
されどキムチ

細見和之

今年の冬から春にかけて、三寒四温の典型的な毎日が続き、体調をくずしたひとも多いのではないかと。私も久しぶりに風邪をひいてしまった。いままも若干鼻をくずつかせている状態である。そういう体調で、今回も力作にふれることができた。

まずは『八月の群れ』第79号。

同誌掲載の、野元正「雨乞い」は、四百字詰め換算四〇枚超の短篇(以下、「四百字詰め換算」は省略)で、雨ななし水をめぐる寓話のような物語。

主人公の「美羽」は五〇歳前後。独り暮らしをしながら、部屋のベランダにたくさんの鉢植えの花を置いている。その年は空梅雨で、雨が降らず、鉢植えの花も元気がない。美羽は二〇年前には職場で知り合った「純平」と暮らしていたのだが、純平は蛇口のパッキンを買ってくると行って出かけたあと、仕事もやめて行方不明状態。美羽は、花に水をやり

ながら花と会話するような毎日である。そんなとき、職場の同僚から「花たちの気持ちの研究する会」について教えられる…。

基本的に美羽を視点人物とする三人称小説なのだが、最後に「私」の一人称小説に変わる。それまでのところはすべて「私」が見ていた夢の世界ということになるのだろうか。人物それぞれが雨＝水をもとめる花と一体化するような不思議な印象が残る。

同誌掲載の、松長子「猫神さん」は、五〇枚ほどの手のこんだ短篇。

冒頭、中学三年の「昇(のぼる)」が踏み切りのところで電車に飛び込んで自殺しようとする。それを猫が救う。昇は試験でカンニングをしてしまい、それがばれて自死しようとしていたのだ。その場には高校二年の「玉代(たまよ)」もいて、昇は彼女に連れられて近くの「猫神さん」を祀る神社を訪れる…。

これはどういう物語かといささか訝しむくらいながら読み進むと、その「猫神さん」をめぐむる物語が、高校の演劇部の部長が学園祭での芝居のために書いたシナリオだったことが分かる。そこからその部長の視点で、物語を劇にするための部員たちの努力、部長のシナリオに対するかすかな異感などが綴られてゆき、それを受けて部長も改稿を試みる。そのあたりは言ってみればきわめてプレヒト的。作品それぞれが自らを超えてゆく萌芽を抱え

ているのだ。

『メタセコイア』第21号掲載の、蛇川信「ステイ・ビーチ」は、若い時期の苦い思いを、一四〇枚あまりで描き切った力作。

愛知県と静岡県のある町の工場で管理部の仕事をしている「僕」は、早朝、サーフィンをしてから職場に出かける。就職二年目で、すこしは仕事に慣れてきたところだが、あまり打ち込めない。その職場は祖父が創業した会社で、「僕」は御曹司的な立場にもあるのだが、サーフィンだけが救いのようだ。

いっぽう「僕」には「ミサキ」という名の恋人が神戸にいて、彼女との結婚も考えている。しかし、彼女の父は証券会社を経営していて、ひとり娘のミサキには婚養子がほしいと望んでいる。「僕」はそういうミサキとの関係もきちんと考えきれないでいる。婚養子になることの問題よりも、「僕」自身が自分の人生をどう生きてゆくか、踏ん切りがつかないことが大きいのだ。

時代は一九八〇年代後半。バブルに向かう真つただ中で、「僕」と同世代の私には、「僕」が陥っているあてどない感覚がよく分かる気がした。

同誌掲載の、よしむら杏「だれもわるくない」は、弁護士事務所を舞台にした一〇〇枚あまりの作品。

冒頭、若手弁護士の安藤奈津が「いっぱい

のお運びで：」と法廷で落語のマクラを口にしてしまう。学園ものが得意な作者だが、今回は弁護士が主人公と想っていたら、奈津は「スクールロイヤー」として小学校に週二回勤務することになるのだ。そこで、奈津は落語クラブを作る。じつは奈津は八歳のときに「こども落語全国大会」で優勝して天才少女と騒がれた身だったのだ。冒頭の落語のマクラはそういう背景があつたことなのだ。

奈津は小学校でやはり落語に詳しいアリスという生徒と出会い、アリスが陥っていたイジメの問題まで取り組むことになる。そこから、奈津自身が弁護士として挫折しかけた体験が振り返られる。タイトルにあるように「だれもわるくない」のに、人間関係は、大人でも子どもでも、どこかでねじくれてしまう。落語はそれを解きほぐす知恵の結晶でもあるのだろう。

同誌掲載の、和泉真矢子「橋の上で」は、二〇枚ほどの短篇で小学校一年の「私」が捉えていた世界を鮮やかに描いている。

時代は「昭和三十年」。ちよつとませた小学校四年の「支那そば屋」の「末ちゃん」は、美空ひばりの歌が得意で、ひばりの歌を歌ってはみんなに聞かせるガキ大将みたいな女の子。

その末ちゃんと「私」はあるとき橋の上で出会う。橋から覗くと、川の真ん中で白っぽ

い木箱が浮いている。末ちゃんはそこには犬のクロが入っていると言う。支那そば屋で飼っていた犬が死んだのだ。しかし、木箱は岩に引つかかっているのか、流れないまま。たくさん雨が降らないとだめだと末ちゃんは言う。二日後ようやく強い雨が降って木箱は流れてゆく。それを「私」は末ちゃんとともに見送る…。

「末ちゃん」というのは末っ子だからつけられていた綽名なのだろうか、読み方は「すえちゃん」でいいのだろうか。最低限の説明とルビがほしいところだ。

『せる』第128号掲載の、谷山結子「ある事例」は、訪問看護の事務所を舞台に、医師と看護師の関係を七〇枚あまりで描いている。

宇野珠子は訪問看護事務所で見護師として働いている。事務所の代表尾藤は珠子がかつて勤務していた総合病院の上司だった。珠子は尾藤の生き方、働き方に共感を抱いているのだ。しかし、訪問看護の対象の患者から、医師、辰巳の悪評が寄せられる。辰巳はクリニクを経営しながら、訪問介護にも力を入れてくれていて、尾藤が信頼を寄せている医師だった。

そんなとき、辰巳の診察を受けていた患者が、病院に緊急搬送されて死んでしまう。患者が果物などを喉に詰まらせていたのに、辰巳は吸引処置をしなかったようだ。それでも

辰巳への不信感を受け付けない尾藤…。

問題の根本が辰巳個人にあるのか、相談員、ヘルパーなどもふくめた訪問看護というありかたの持ついわば構造にあるのか、そのあたりが不明確で、若干もどかしい読後感が残る。同誌掲載の、津木林洋「塗り込められた部屋」は、鬱屈を抱えた中年男がSNSなどの罵倒行為に嵌ってついにはテロリストになるまでを、二二〇枚あまりでテンポよく描いた作品。

主人公の「加賀」は通販の大きな配送工場で、ピッキングのアルバイトをしている。大学卒業の際に就職の氷河期とぶつかり、うまく就職できなかつたのだ。父親は早くに亡くなり、母親ともほとんど関係は切れている。

唯一の楽しみはSNSで罵倒行為に耽ることだ。不倫報道があつた女優に、自動反復できる特殊なソフトを使って「死ね、死ね、死ね」といった打ち込みを加賀が繰り返していると、その女優が自死してしまう。加賀は名誉毀損で逮捕されるが、事前にSSDを焼却処分したうえ、完全黙秘を貫く…。

母親の遺骨を散骨するために訪れた海辺で、加賀はテトラポットのあいだに散らかった遺骨を拾おうとして波に打ちつけられる。加賀の人間性の、最後の残余と思えるものが見られるところだ。

配送工場の内部の様子から、SNSの罵倒

ソフトの仕組みまで、じつに緻密に描かれていて、いつもながら感心させられる。どちらも別世界とした言いようがないが、まぎれもない私たちが生きている同時代の一部なのだ。冒頭から加賀太郎は名前ではなく「彼」という人称代名詞で表記されている。誰もが加賀であり得ることが示唆されているのだろう。

『青磁』第47号掲載の、松江農「スイートルーム」は、「おたく」としての「自分」を描いた、四五枚あまりの作品。

冒頭「自分」はコロナに罹患して、部屋に籠っている。大学に進学して家を離れた長男の部屋だ。その部屋を見渡して、「自分」はかつての自分の部屋を思い起こす。本、雑誌、レコード、ビデオテープで埋め尽くされていた部屋。ここから小説というよりも「おたく批評」の展開となる。さらに、「幼女連続誘拐殺人犯のM」が逮捕された際にニュースで映し出されたMの部屋の光景が自分の部屋の姿と重ねられる…。

おたく論的な部分が大半を占める作品だが、Mが逮捕されたとき、私も衝撃を受けた。私自身は「おたく」とは言えない人間だったが、偶然とはいえ、Mの年齢、身長、体重までが当時の私と同一だったのだ。そして、二転三転する報道内容から冤罪ではないかと私は強い疑いを抱いていた。あの事件を自ら「おたく」という立場で受けとめていた作者の作品

に、私は深い印象を受けた。

同誌掲載の、林達「腫の奥に」は、いまは六〇歳近くになっていてる高校時代の同級生が、高校時代を振り返る一一〇枚近くの作品。

仕事で東京に出てきた「舜(しゅん)」は「堯(たかし)」と居酒屋で待ち合わせる。二人は二軒目にバーを訪れる。大学生時代に二人で行っていたバーで、堯はいまも常連のようだ。そのバーで堯は舜に高校時代のことを思いださせる。中心にあるのは、「森尾由莉」という女性徒のことである。そこから由莉と関わる舜の印象的な回想が展開されてゆく。

由莉はピアノで芸大の受験をめざしていたが、由莉と舜には小説の愛読者という共通点があった。舜は二年のときクラスノートに由莉を意識した文章を書き、三年の夏には由莉から謎めいた手紙が届いたのだった。そこには、年老いた花火師をめぐる、井上靖の小説の一節らしいものが引用されていた。舜は井上靖の作品からそれらしきものを採って読むのだが、あまりに虚無らしく、由莉には応答することができなかった。

その一節はこの作品の冒頭に配されているのだが、それは井上靖の小説ではなく散文詩のだった。井上靖は同じ花火師の物語を、小説と散文詩で描いていて、小説のほうでは虚無的だが、散文詩のほうでは自らの生きかたを肯定的に描いたものと読めるのだ…。

半世紀近い隔たりを経て、井上靖の作品の一節がどう変容を遂げるか。そういう点でも感慨深い作品だ。

『文宴』第142号掲載の、橋倉久美子「自転車」は、二五枚ほどのちよっと珍しい短篇。タイトルにあるように「自転車」がテーマなのだが、自転車について語られているのではなく、自転車が語られている。そう、自転車による一人称語りなのである。

変速ギアもない、小豆色の平凡な「ママチャリ」。それを購入したのは青年だったが、実際に使用したのはその祖父。その老人が亡くなったあとは孫娘の夫が自転車を持ち帰り…と「私」の使用者、所有者は変遷してゆく。自転車の視点をつうじて、一族の不思議な叙事詩が描かれているようで、新鮮だった。

同誌掲載の、藤原伸久「ひとり笑う」は、あつけらんとした不倫関係を生きている、高校の同級生カップルの姿を、女性「真友(まゆ)」の視点で、七〇枚あまりの作品として描いている。

真友は「若年性認知症」を発症している母と二人暮らし。自宅で翻訳の仕事をしている。「コマチ」という名の柴犬を飼っていて、その犬の散歩がてら、「B介」と逢瀬を遂げている。「B介」という綽名は、高校時代に同じクラスに中山裕介と高木裕介がいて、高木が「A介」、中山が「B介」と呼ばれていたのに由来

する。

真友の母親が腸閉塞で手術を受ける、コマチが近所の子どもにチョコレートを食べさせられて死ぬ、といったこと以外に、とくに出來事は生じない。冒頭で、人体がだんだんと腐ってゆく姿を描いた仏教画、九相図に大学生の真友が強い関心を持っていたことが示されているのだが、それと真友の現在がどう繋がっているか、必ずしも明確ではない。

『飛行船』第32号掲載の、萬野行子「センブリ」は、亡くなった母親の遺品を整理する「私」の姿を一八枚ほどの短篇で描いている。五年前に亡くなった母親の寝室で「私」は几帳面に記された家計簿を眺める。「私」が子どものころからのものが丁寧に保存されているのだ。家計簿に挟まれている押し花は「私」にさまざまな記憶を呼び起こす。とくにセンブリの花は、祖母が煎じて飲んでいけるセンブリへの思いが「私」にあつて、母が父と一緒にわざわざ山で採集してきたものだった。押し花によって開かれてゆく記憶の像が鮮明に浮かび上がってくる。

同誌掲載の、高木純「ゼロポイントフィールド」は、このところ量子力学の分野で唱えられているという「ゼロポイントフィールド」という考えを文学的に展開しようとする五五枚あまりの意欲作。

冒頭、二九歳の「僕」は交通事故で瀕死の

状態から奇跡的に命を回復する。その「僕」を蘇生させたのは医師の「朝比奈」だった。ある日その朝比奈が「僕」に電話をかけてきて、自分が新しく勤務することになった研究所に「転院」して研究に協力して欲しいと求める。命の恩人の要請なので「僕」は快諾したいのだが、どんな研究なのか、皆目分らない。朝比奈の助手と称する人物が病院の「僕」のもとにやって来て、量子力学において「意識」を理解する方法として「ゼロポイントフィールド」という考え方があつること、その量子力学による研究に「僕」の協力が必要であることを説明する。

研究所に行くこと、そこにはあと二人、瀕死状態から朝比奈の手によって蘇生した同様の人物がいて、まず三人は量子力学の最先端を学ぶ学習をはじめることになる…。

なかにも、「物質からどうして意識が生じるのか」という「意識の謎」が登場するが、これは私自身、解答を得たい問いそのものだ。「量子真空」とか「静寂意識」とか、基本的な概念も使われていて、よくこれらを文学作品として結実させたものだと感じる。それでも最後はいささか唐突に終わっている。AIや量子力学の展開は、SFが挑戦しているのか、挑戦されているのか、ともあれ、そこに文学の新たなテーマの一つがあることは確かだ。

『VIKING』第889号と890号に上下で

掲載されている、長谷川和正「ダチヨウが飛んだ？」は、合わせて一五〇枚を超える作品で、今回読んだなかでいちばん長い部類に属する。

「俺」は四二歳で、人事異動の結果、「城山土木事務所・管理第一課長」に昇格した。第一課は七人からなるが、なかに「絹谷」というやっかいな課長補佐がいる。「新型うつ病」を口実に一向に仕事をせず、仕事でも居眠りをしている。それでいて、新型うつ病たるゆえんだが、アフターファイブには洗刺としていたりする。職場にクレマーがやって来ると、絹谷は机の下に潜り込んだりする。それで職場では「ダチヨウ」と揶揄されている。

この絹谷や課の若いメンバーである児島らとともに「俺」が過ごす一年あまりが作品内の時間。放置自転車問題を解決する現場仕事では不意に強い戦力となつて「ダチヨウ」が空を飛んだ」と若い児島を驚かせる絹谷だが、それ以降、むしろうつを悪化させてゆく。次第に「俺」もうつ症状を呈するようになり、通院して薬を飲むようになる。若い児島までもがうつ病を発症するようになる。

三人ともが追い込まれているこの袋小路の打開方向を示唆する形で、後半、「城山動物園」から三羽のダチヨウが逃げ出す。しかし、飛べないダチヨウはあつけなく捕えられ、一羽は脚に傷を負ってしまう…。

この物語の中心は明らかに絹谷だが、彼がダチヨウとなるにいたった経緯がいますこし詳らかであれば、と惜しい気がする。

『港の灯』第17号掲載の、かめいのり子「遠くにある雲」は、中学のときの同級生との思いがけない再会を五〇枚弱で描いている。

主人公の「由美」は現在五七歳。一〇年前に中学生の同級生だった「澤田直樹」と再会した。ウエブサイトで偶然「サワダ・ナオキスポーツカメラマン」というアカウントを見つけ、あの澤田直樹だと直感して、DMを送ったのだった。中学校の最後の別れるとき、澤田はスポーツカメラマンに、由美は文章を書く仕事に就くことを約束して指切りまでしたのだった。

二カ月後によくやく返事が届いたが、澤田は由美のことをよく覚えていないようだった。さらに二カ月後に届いたメールでは、母親の治療のためお金を融通してほしい、と書かれていた。典型的なネット詐欺かと疑いながら待ち合わせ場所が確かに澤田であることを確かめて、由美は三〇万円を手渡す。その半年後、澤田が亡くなったという噂をかつての同級生から由美は知らされる。

ところが、一〇年後、母親が亡くなった老人ホームで、由美は澤田らしき男を見かけたのだ。いまでは「若年性認知症」を発症している澤田がどういいう人生を歩んで来たかを、

由美は澤田の従兄弟の「利男」からようやく聞かされる…。

作品の最後、澤田が由美の携えていたカメラで雲の写真を撮影するシーンが爽やか。

『私人』第12号掲載の、根場至「ダッコちゃん」は、シニア世代の微妙な関係を三五枚程度で描いた短篇。

早朝六時、駅前のビルから七〇歳前後の人々が姿を現わし、うち三人の男たちがマクドナルドに入って、コーヒーなどを飲みながら談笑する。「練成会」という談話会のメンバーで、三人とも同じ大学の出身。「野本」がいちばん年長で六〇年安保世代、「黒沼」がいちばん若くて七〇年安保世代、「吉村」がその中間世代である。

三人は四方山話を交わすのだが、五歳ぐらいの違いが会話に微妙な陰影を添える。三人とも政治的には左派のようだが、そこには踏み込まない。吉村と黒沼の二人は野本に気を遣っているのだが、どんな話題で野本の地雷を踏んでしまうか分からない。気の置けない関係とはとても思えないのだが、三人ともその語り合いの場を大切にしているようだ。

あるとき、人の死にかたは二種類か四種類かというテーマで、野本は自殺、他殺、事故死、病死の四種類説を唱え、吉村は自殺、他殺の二種類説で対抗し、黒沼は吉村説に賛成する。そんなことのと、野本が睡眠薬で自

死してしまう…。

たがいの胸のうちをきちんと明かし合えないまま、それでも言葉は交し合っている、そういうシニア世代の姿が危うい感覚で描かれている。

『AMAZON』第529号掲載の、安堂瑛「キムチ」は、在日朝鮮人にとってのキムチの意味を、コメディタッチの四〇枚の作品で鮮やかに描いている。

会社勤めをしている「ヨソホ」は、妻の「スニ」が潰れてきているキムチが大好き。食事のときキムチ抜きには考えられない。しかし、民族学校の教員をしているスニはこのころ忙しく、彼女にはキムチを漬ける時間がない。ヨソホは市販のキムチを買ってみるが、とても口に合わない。キムチのない食事が続くと、ヨソホは苛々を募らせ、ついに夫婦喧嘩に至ってしまう。ヨソホの苛立ちは職場にまで悪い影響を及ぼしてしまう。

ヨソホは同じ在日の同僚からいまだきキムチを漬けてくれる妻などいないこと、また「チエサ（祭祀）」のときに母親からヨソホの父親もキムチが大好きで夫婦喧嘩の原因にもなったことなどを聞かされる…。

文体は優れた翻訳作品のように明晰で、構成も申し分ない印象。「たかがキムチ、されどキムチ」という、ヨソホとスニがともに眩く言葉が切なく響く。